

教員の医療的ケアの捉え方に関するアンケート調査結果

I. アンケート調査の概要

1. 調査目的

本調査は、特別支援学校において医療的ケアを実施する教員の思いや不安感を明らかにし、教員への必要な支援や医療的ケア体制の在り方について基礎的な資料を得るために行った。

2. 実施期間

平成 29 年 9 月～10 月末日

3. 調査対象

全国の肢体不自由を対象とする公立養護学校 252 校を対象とし、今年度実際に医療的ケアを実施している教員（各校 1～4 名）に回答をお願いした。

II. アンケート調査結果

1. 調査紙回収数

配布校数 292 校のうち、163 校から回答を得られた（回収率 55.8%）。回収枚数は 408 枚であった。そのうち、医療的ケアを実施している教員がいない、または医療的ケアを必要とする児童生徒が在籍していないと回答した 78 枚を分析から除外し、85 校、330 枚を分析対象とした。

2. 対象者属性

対象者の属性内訳は以下の通りであった。

対象者の属性		
属性	項目	人数(%)
性別	男	80 (24.2%)
	女	244 (73.9%)
	不明	6 (1.8%)
年齢(年代)	20代	72 (21.8%)
	30代	70 (21.2%)
	40代	97 (29.4%)
	50歳以上	85 (25.8%)
	不明	6 (1.8%)
教員の 経験年数	1年未満	7 (2.1%)
	1年以上5年未満	64 (19.4%)
	5年以上10年未満	65 (19.7%)
	10年以上20年未満	61 (18.5%)
	20年以上	122 (37.0%)
	不明	10 (3.0%)
医療的ケアの 経験年数	1年未満	68 (20.6%)
	1年以上3年未満	92 (27.9%)
	3年以上5年未満	54 (16.4%)
	5年以上10年未満	67 (20.3%)
	10年以上	42 (12.7%)
	不明	7 (2.1%)

対象者の医療的ケアの経験状況

	5人以上(%)	4～2人(%)	1人(%)	経験なし(%)	不明(%)
口腔内の喀痰吸引	47 (14.2%)	75 (22.7%)	83 (25.2%)	118 (35.8%)	7 (2.1%)
鼻腔内の喀痰吸引	34 (10.3%)	61 (18.5%)	60 (18.2%)	168 (50.9%)	7 (2.1%)
気管カニューレ内の喀痰吸引	13 (3.9%)	36 (10.9%)	44 (13.3%)	227 (68.8%)	10 (3.0%)
胃ろう又は腸ろうチューブ による経管栄養	53 (16.1%)	122 (37.0%)	103 (31.2%)	45 (13.6%)	7 (2.1%)
経鼻経管栄養	27 (8.2%)	70 (21.2%)	87 (26.4%)	139 (42.1%)	7 (2.1%)

3. 対象者の勤務する学校属性

対象者の勤務する学校の属性内訳は以下の通りであった。

対象者の勤務する学校の属性

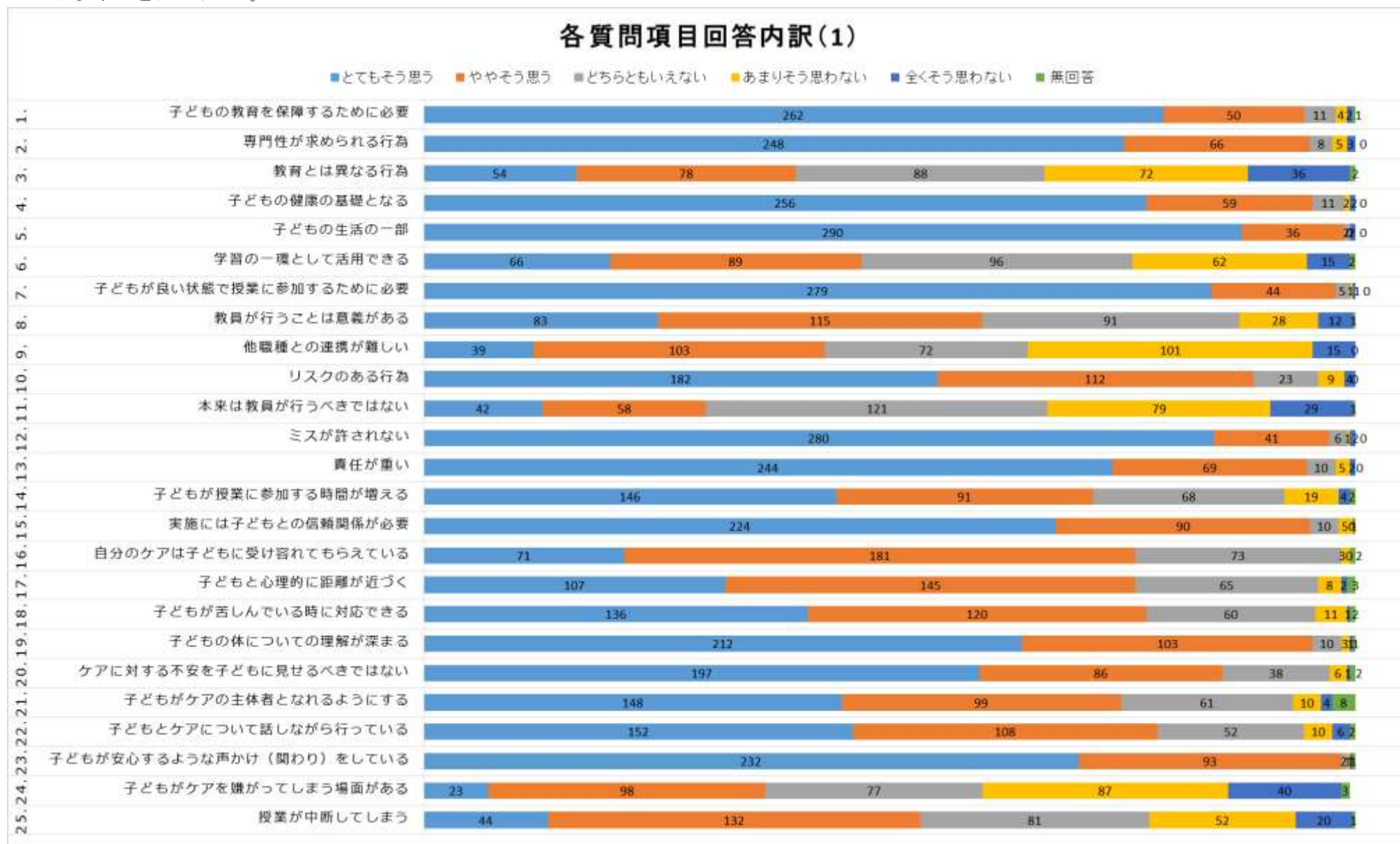
属性	項目	人数(%)
設置校種	幼稚園(幼稚部)	22 (43.3%)
	小学校(小学部)	286 (8.2%)
	中学校(中学部)	264 (42.4%)
	高等学校(高等部)	259 (4.2%)
	不明	6 (1.8%)
学校の 障害種	肢体不自由単独	143 (6.7%)
	肢体不自由・病弱併置	27 (86.7%)
	肢体不自由・知的障害併置	140 (80.0%)
	その他	14 (78.5%)
	不明	6 (1.8%)
在籍児童 生徒数	50人以下	37 (11.2%)
	51人～100人	81 (24.5%)
	101人～150人	96 (29.1%)
	151人～200人	35 (10.6%)
	201人以上	68 (20.6%)
	不明	13 (3.9%)
関係機関の 設置状況	医療機関併設	4 (1.2%)
	医療機関隣接	50 (15.2%)
	福祉施設併設	1 (0.3%)
	福祉施設隣接	4 (1.2%)
	寄宿舎併設	69 (20.9%)
	なし	187 (56.7%)
	不明	13 (3.9%)
医療的ケア を要する 児童生徒の 在籍人数	5人以下	34 (10.3%)
	6人～10人	46 (13.9%)
	11人～20人	103 (31.2%)
	21人～30人	78 (23.6%)
	31人以上	56 (17.0%)
	不明	13 (3.9%)
医療的ケア 実施教員数	1人	11 (3.3%)
	2人～5人	43 (13.0%)
	6人～10人	45 (13.6%)
	11人～20人	92 (27.9%)
	21人以上	120 (36.4%)
	不明	19 (5.8%)

対象者の勤務する学校の看護師数

	0人(%)	1人(%)	2人～5人(%)	6人～10人(%)	10人以上(%)	不明(%)
常勤看護師	110 (33.3%)	38 (11.5%)	165 (50.0%)	8 (2.4%)	0 (0.0%)	9 (2.7%)
非常勤看護師	87 (26.4%)	41 (12.4%)	152 (46.1%)	33 (10.0%)	6 (1.8%)	11 (3.3%)
訪問看護師	304 (92.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	26 (7.9%)

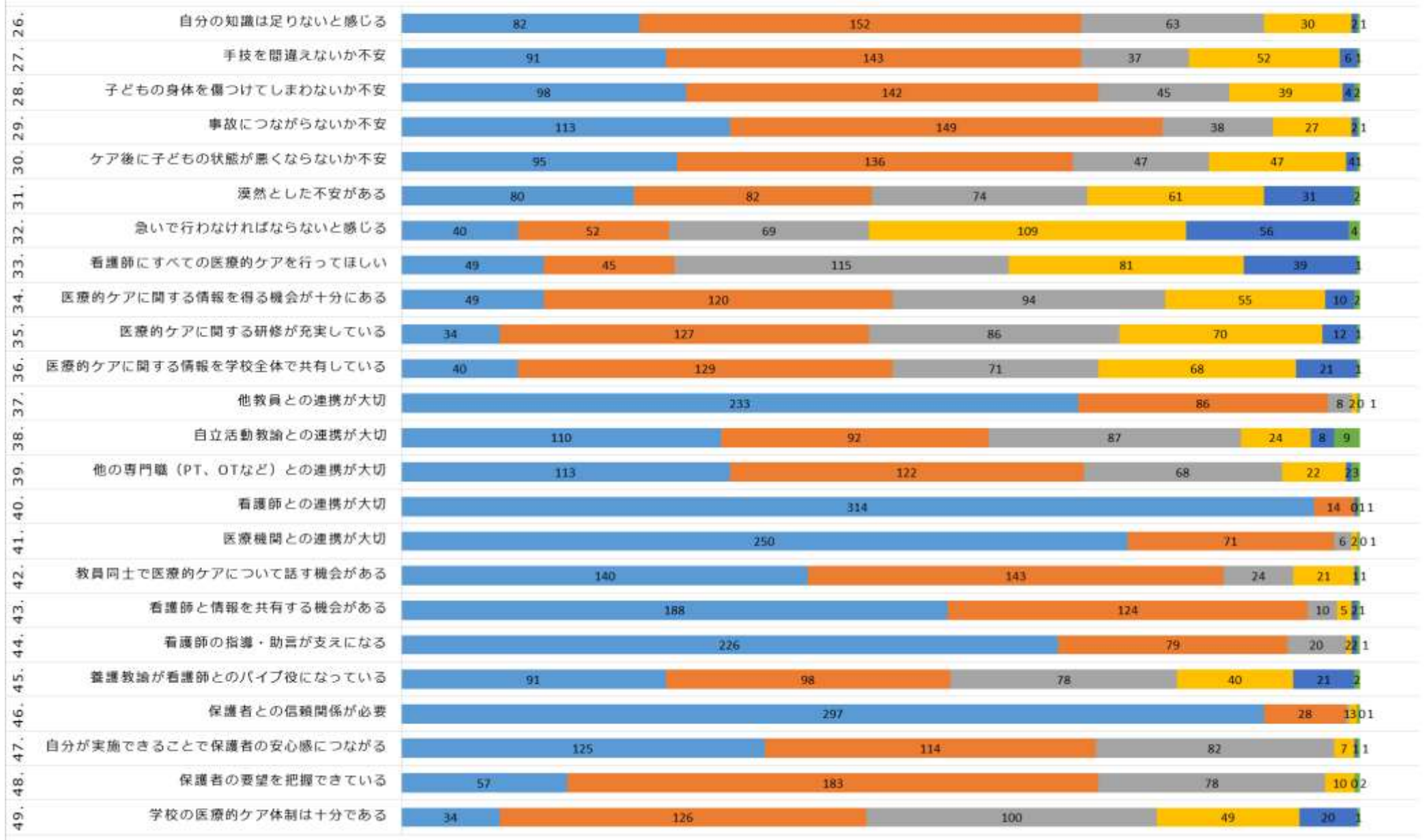
4.「医療的ケアの捉え方」項目の回答内訳

「あなたが医療的ケアを実施していて感じることをお尋ねします。あてはまる数字を1つ選んでください」という質問に対する各項目の回答内訳は以下の通りであった。



各質問項目回答内訳(2)

■とてもそう思う ■ややそう思う ■どちらともいえない ■あまりそう思わない ■全くそう思わない ■無回答



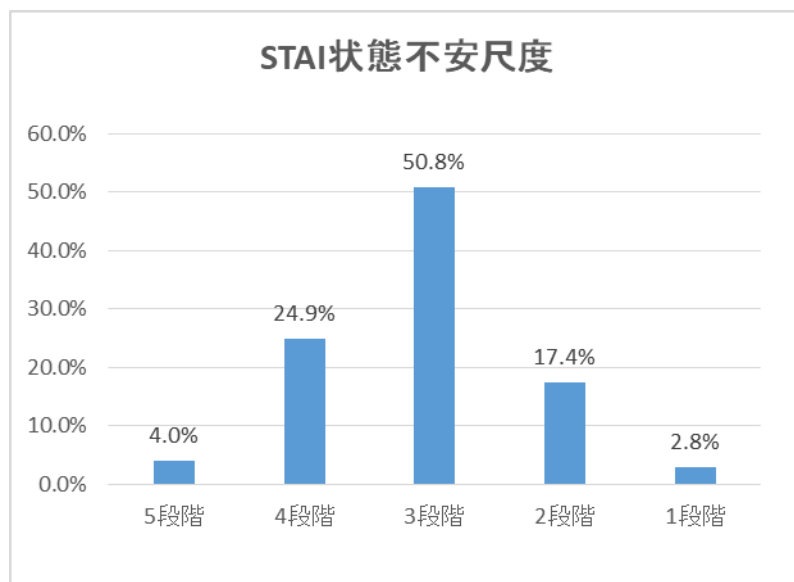
5. 新版 STAI 状態不安尺度結果

医療的ケア実施時の不安感を評価するために、Spielberger ら(2000)の「新版 STAI 状態・特性不安検査」を用いた。今回の調査票では、状態不安尺度のみを使用した。20 項目から成り、回答は「全くあてはまらない」「いく分あてはまる」「かなりよくあてはまる」「非常によくあてはまる」の 4 件法である。

「あなたが医療的ケアを実施している最中の気持ちについてお尋ねします」という質問に対して、各項目に当てはまる数字に○を付けて回答をしてもらった。

STAI 不安尺度項目の回答に欠損がない 321 名を分析対象とした。状態不安尺度の中の、不安存在尺度 10 項目、不安不在尺度 10 項目の得点を合計し、尺度得点を得た。尺度得点が高いほど状態不安が強いことを示している。

新版 STAI の不安の段階区分に当てはめると、段階 5（尺度得点 65 以上）が 13 名（4.0%）、段階 4（尺度得点 55 以上、65 未満）が 80 名（24.9%）、段階 3（尺度得点 45 以上、55 未満）が 163 名（50.8%）、段階 2（尺度得点 35 以上、45 未満）が 56 名（17.4%）、段階 1（尺度得点 35 未満）が 9 名（2.8%）であった。



6. 分析結果

①「医療的ケアの捉え方」項目の分析

教員の医療的ケアの捉え方 49 項目について因子分析を行った。その結果、「医療的ケアの不安因子」、「教育的視点因子」、「医療的ケアに情報研修機会因子」、「児童生徒との関わり因子」、「学校生活の基盤因子」、「医療的ケアの共有因子」、「責任・専門性因子」、「専門職との連携因子」、「保護者との関わり因子」が抽出された。

②STAI 不安尺度と各因子間の関連

STAI 不安尺度において、尺度得点が 50 以上を不安高群、尺度得点が 49 以下を不安低群として t 検定を行った。その結果、不安低群に比べて不安高群は、「医療的ケアの不安因子」、「責任・専門性因子」が高い傾向にあることが分かった。また、不安高群に比べて不安低群は、「教育的視点因子」、「医療的ケアの情報・研修機会因子」、「児童生徒との関わり因子」、「学校生活の基盤因子」、「医療的ケアの共有因子」、「保護者との関わり因子」が高くなる傾向にあることが分かった。

③教員の医療的ケア経験年数との関連

教員の医療的ケアの経験年数によって、医療的ケアに対する捉え方に影響が表れるのかを検討するために、t 検定を行った。その結果、医療的ケア経験 5 年以上群に比べて、医療的ケア経験 5 年未満群は「医療的ケアの不安因子」が高い傾向にあることが分かった。また、医療的ケア経験 5 年未満群に比べて、医療的ケア経験 5 年以上群は「教育的視点因子」、「児童生徒との関わり因子」、「保護者との関わり因子」が高い傾向にあることが分かった。

さらに医療的ケアの経験年数と STAI 不安尺度との関連を調べるために t 検定を行った。その結果、医療的ケア経験 5 年以上群に比べて、医療的ケア経験 5 年未満群は医療的ケアに対する状態不安が高い傾向にあることが示された。

Ⅲ. 今後について

今回の調査の詳しい分析内容、結果につきましては、今後雑誌等での公表を検討しております。ご多忙の中、アンケート調査にご協力いただきまして誠にありがとうございました。